

徳島文学協会発足式

平成二十九年五月二十八日、ホテルクレメント徳島において「徳島文学協会」の発足式が執り行われた。会員、来賓を含め二十九名の方に参加していた。

冒頭オープニングムービーが流され、発足式の開会が宣言された。会長佐々木の挨拶のあと、来賓の四国大学松重和美学長より、協会運営における内容の充実を期待するという旨の祝辞をいただいた。また、飯泉嘉門徳島県知事の祝電が披露された。

そして芥川賞作家吉村萬志氏による乾杯のご発声で祝宴が幕を開けた。

歓談の後、第二十三回三田文学新人賞佳作を受賞した高田友季子さんに対し、吉村萬志氏より花束の贈呈があった。吉村氏からは励ましの言葉を頂戴し、高田さんからはこれからの抱負が語られた。

その後、佐々木会長が来場者に対して、徳島文学協会の活動方針と目標についてプレゼ



ンテーションを行った。続いて四国大学経営情報学部メディア学科、長沼次郎教授より「AIに小説は書けるか？」というテーマで講演をいただいた。最後に佐々木よりご来場の皆様にお礼の挨拶があり祝宴を終了した。出席者全員で記念写真を撮影し散会となった。

受賞の言葉

高田友季子

二十代の前半、何もできない自分が嫌だった。同世代の若者たちの活躍を目にしては苛立ち、八つ当たりの末に壊した人間関係もあった。

二十代の終わり頃から、ものを作ることでその気持ちを消化できるようになった。最初は小説ではなかったけれど、言葉を繋げていくうちに、物語を書きたいと思うようになっていた。三十歳になって初めて、長い話を書いた。社会から必要とされない人たちの、底に沈んでいくような生活を描きたいと思っ

AIに小説は書けるか？

長沼次郎(四国大学)

徳島文学協会の「AI研究部門」は小説を科学するために設立された。ひと昔前であれば、太い万年筆と原稿用紙が作家の道具であった。しかし、最近ではパソコンとワープロソフトを使うのが当たり前だ。様々な考証や調査のためにインターネットも駆使する。このような大きな変化もわずかに二十五年前のことである。インターネットの

れど私が描きたいのは、そのような世界で遣る瀬無い思いを抱かせる事象であり、人々なのだ。ちょうど十年ほど前の私が足掻いていた日々のように。今はただ入り口に立っているに過ぎない。それでも以前の私がいた場所より、少しは前に進んでいるはずだ。物語る言葉が私に新たな景色を見せてくれる。その可能性を信じて、これからも小説を書いていきたい。



商用利用は一九九二年、パソコンの一般家庭への普及はWindows95からである。一方、近年の人工知能(AI)の進歩は著しく、まだ十年はかかると言われている。囲碁の世界でも、世界最強のプロ棋士、柯潔(カ・ケツ)と囲碁AI「AlphaGo」の三番勝負で、AI全勝のニュースはまだ記憶に新しい。チェスも将棋も既に敵わない。AIは三十年以内には間違いなく、建築、交通、水道、ガス、電気、情報(ICT)に次ぐインフラになるだろう。そんな時代の作家はAIを使わないだろうか。AlphaGoは近年進歩の目覚ましい画像認識におけるディープラーニングと呼ばれる機械学習によって高度に学習された囲碁AIソフトである。それにしても囲碁の十九×十九の盤面を二次元画像データと見なすところには驚く。まずプロ棋士の棋譜を用いた教師学習を、次に自己対戦による強化学習を、さらにより勝ちに導く評価学習を。その強さは総計六千万盤面にもおよぶ豊富な学習データで鍛えられ支えられている。小説に限らず音楽や美術など芸術へのAI応用は、情報科学の分野においても最も難しく未知への挑戦が始まったばかりである。なぜなら小説には囲碁のような勝ち負けの評価基準がない。審査委員の頭の中にある良し悪しの評価基準を確立することが第一歩だ。また最終作品とともに途中過程の添削作品も学習データとして貴重であろう。本協会の各種の小説講座を含め、会員の皆様との協力や協調により、作家に寄り添えるAI応用を一步でも進めてみたい。

徳島文学協会とは

「徳島文学協会」は徳島における文学シーンに全く新しい風を吹き込む芸術団体となることを目指して平成二十九年一月に設立されました。

少子化や過疎化が大きな社会問題となるなか、徳島に暮らす人々が希望や生きがいをもって生活できるように、文化的、芸術的な側面から県民の皆さまをサポートできれば幸いです。

また徳島から、中央の文壇でも活躍できる新たな作家、文学者を輩出するという重責も担っています。

「徳島文学協会」は財政の大半を会員の皆様からの会費によって支えていただくこととなります。

つきましては協会の活動にご賛同いただける方がおられましたら、何卒「徳島文学協会」にご入会いただき、徳島を「文学の街」とするための財政的基盤づくりのご支援を賜りますとともに、新しい文学者を育てるお力添えをお願い申し上げます。ご次第です。



徳島文学協会の主な活動

- 一 県民に優れた国内外の文学活動に接する機会を提供するための各種講演活動
- 二 優れた文学作品や作家を表彰および顕彰する活動
- 三 県民に広く文学に親しんでもらうための講座等の開催
- 四 県内の学校、大学と提携しての文学研究および文学教育活動
- 五 その他、本会の目的に沿った文学的活動

徳島文学協会の入会と入会特典

※「徳島文学協会」は生徒、学生から一般社会人、シルバー世代の皆さままで、徳島にゆかりのあるなしにかかわらず、文学に関心のあるすべての方に入会いただけます。なお「徳島文学協会」に入会(年会費 個人七千円・法人一万三千円)いただきますと以下の会員特典が受けられます。

- 一 会員証が発行されます。
- 二 文学講座が受けられます。
(文学講座、小説実作講座、読書会、エッセイ執筆講座などが会員価格で受講できます)
- 三 徳島文学協会のホームページに作品を発表できます。
- 四 徳島文学協会の役員理事から、有料

で作品の総評がもろええます。
協会のニューズレターおよびメールマガジンをご送付します。

五 協会限定の新年会や祝賀会に参加できます。(別途会費が必要)

六 様々なスペシャル文学イベントに会員特別価格でご招待します。

七 八 文芸誌「徳島文学」への投稿資格が得られます。また雑誌「徳島文学」を一冊進呈します。

九 特別に作品の上達を目指される方に限り、協会会長の小説のマンツーマン指導が受けられます。(五十枚以上の作品添削一作品五万円で徹底指導)

生きることの実感

佐々木義登

皆さんは日々をどんな思いで暮らしておられるでしょうか。

ちなみに私は日常の仕事に忙殺されたり煩雑な人間関係に束縛されて、心のゆとりも失い、ふと気が付けば月日が過ぎ去っている、自分はいったい何をしていたのかと反省することもしばしばです。ひよっとしたら皆さんも私と大差ない日常を送っているかもしれません。

そんな中で、一つだけ心の拠り所になるものがあります。私の場合それが「文学」です。小学生の頃から小説を読むのが好きでした。現実から自由になって様々な

物語の世界のめり込んだ時期もありました。私が「文学」と本当の意味で出会うことになったのは大学時代でした。当時、作家になる夢を抱いて近代文学を学んでいた私は、上総英郎氏のゼミに入りました。上総氏は遠藤周作批評で知られた文芸評論家で、教師としても私たちに文学の奥深さを教えてくれました。恩師のもとでドストエフスキーや植谷雄高、三島由紀夫、モーリヤック、遠藤周作、高橋たか子、津島佑子らありとあらゆる作家たちの作品を読む機会を得ました。

今から思えば最も読書に没頭した時期だったと思います。その経験を通して確信したことは「文学」とは、人間の生き方を考える行為そのものだということです。「文学」が有史以来、何千年もなくなかった理由は「文学」の中に「私たちがどう生きるか」というアポリアを解くカギがあるからです。多くの文学作品を読むことは、多くの先人たちの人生を追体験することです。小説の中で懸命に生きる彼らとの邂逅から、私たちは人としてどう生きるべきかを学ぶのです。

あくまで私見ですが、人は「文学」に触れ、同じ作品を読んだ同士で意見を交わしあい、驚きや共感、その他の感情で強く心が動かされる、まさにそのようなときに、「人として生きることの実感」を得るのだと思います。

県民の皆さんに、文学を通して少しでも充実感を味わっていただくために徳島文学協会ではさまざまなイベントや講座を開催します。ぜひそこに参加して、文学作品の奥深さにドキドキしたり、言葉を紡ぐことの楽しさにわくわくしていただきたいと思います。多くの方との出会いを心待ちにしております。

風光る良き日に

藤代淑子

晴天に恵まれた五月二十八日、ホテルケレメントで徳島文学協会の発足式がありました。

徳島文学協会は会員制で、文学に親しむ講座の開催や有名小説家を招いた講演会などを提供する団体です。文学不毛の地といわれてきた徳島から中央で活躍できる作家、文学者を輩出するという強い思いが形になりました。その場に立ち会えた私たちが会員はこれからの文学活動に情熱と使命をもって臨むことになり、賛同する仲間がたくさん集まってくれ、期待しています。

徳島文学協会は生まれたばかりで会員は少人数です。しかし、発足式には四国大学の松重学長や先生方、そして文学協会の門出を祝ってくださる方々がたくさんお集まりくださいました。

芥川賞作家・吉村萬吉先生は名誉会員であり、徳島文学協会を温かく見守ってくださいています。祝辞に込められた熱い思いはユーモアと気さくな人柄が相まって、ふんわりと会場を包んでくれました。

四国大学の長沼先生がAIと文学のコラボレーションの話を読みました。老齡の私には難しい内容でしたが、将棋、囲碁など様々な分野でAIの活躍が報じられていて小説への挑戦もはじまっています。文学講座にロボットが参加、の日は来ないといえませんが。

会場内は文学の話で盛り上がり、和やかな雰囲気の中で頂く料理は最高でした。その中で私は、応援してくださいる方々の期待に沿えるよう頑張ってくださいる作品を書くことと決意しました。会員たちの胸にも、きっと、熱い思いが立ち上がったことでしょう。

徳島県から作家がたくさん生まれるよう、徳島文学協会では老若男女が受賞を目標として日々研鑽しています。講座内容は小説が主体ですが、趣向を凝らした読書会や作家を交えた楽しいイベントの企画もあります。

文学で人生を豊かにしてみませんか。徳島文学協会のホームページで感動を体験してください。

徳島の文学振興

富士野賢太

五月二十八日の徳島文学協会発足式に参加し、自分自身節目を迎えたような気持ちになりました。徳島における文学シーンに新しい風を吹き込むという理念を持って発足した協会ですが、私も地元徳島で文学を学び語り合える場があればいいなと以前に感じたことがあります。私は高校の時に文芸部に所属していましたが、当時作品を応募していた高校生の文芸コンクールが数回で打ち切りになり、徳島で小説を書いても目の目を見ることはないのではないかと漠然と感じました。もし小説家になりたいなら県外に出るしかないと思ったこともあります。部活を除けば学生同士で文学に触

れ合う機会もなかったもので、当時の友人たちと小説の話をすることもありませんでした。お互い口にする機会がなかっただけで、自分の周りにもっと文学に関心を持つ人がいたのかもしれないと今になって思います。

社会人になって再び小説を書くようになったのは、佐々木先生の文学講座に参加したことがきっかけでしたが、その時も当初は文芸団体の設立に関わり本格的な執筆活動に励むことになるまでは思ってもいませんでした。そのことを振り返ると、文学講座に参加してから協会発足までの二年間は、自分自身にとっても「文学とは何か」「何を書きたいのか」という根源的な命題に向き合う期間になったと思います。

徳島における文壇のあり方は確実に変わってくると思います。徳島文学協会は、地方でこれまで文学に関心を持ちつつも関わる機会を持たなかった人達に対して開かれた場になり得ると思うからです。私も微力ながら徳島の文学振興に貢献できればと思っています。

発足式典を終えて

小原真理

平成二十九年五月二十八日は、徳島文学協会にとって記念すべき日となりました。郷土の文芸をより一層発展させようという先人の方々から続く想いが、ひとつの形となったように感じました。これも一重に会長をはじめ、理事並び協会員のみなさまの

努力の賜物だと思えます。式典当日は皆さま、本当にお疲れさまでした。

発足式では、名誉会員である芥川賞作家・吉村萬吉先生はじめ、来賓の皆さま方による素晴らしいコメントを拝聴させて頂いたのも貴重な体験でした。

中でも人工知能による文学の可能性についてのお話は、私にとって不案内な分野で大変勉強になりました。現在における囲碁や将棋のように、小説の分野でも将来的には、ディープラーニングによって様々な事を学習した人工知能が文学賞を受賞する、なんて未来を想像すると恐ろしくもあります。非常に興味深くもあります。

またこの日は、第二十三回三田文学新人賞第二席を受賞された高田友季子さんへの花束贈呈も執り行われました。受賞作「乾き」は、情景描写並びに登場人物の心理描写が細かく丁寧に書かれており、主人公が抱える葛藤や生きづらさみたいなものが、ひしひしと伝わってきました。

高田さんの新人賞受賞は、徳島文学協会発足に花を添える報せとなりましたし、今夏からスタートする小説講座等を通じて、会員の皆さま一人ひとりが互いを高め合えば、第二、第三の新人賞受賞者が現れる日も、そう遠くは無いのかもしれませんが。私自身も未だ若輩者ではありますが、これからも協会の活動を通じて、様々な作品や意見と触れながら日々精進していきたいと思っています。

講座案内

「わたしのイチオシ小説」

お気に入りの小説を持ち寄り、皆さんで紹介し合います。一人一作品、持ち時間五分でおすすめポイントを説明します。プレゼンされる方のほかに、紹介を聞いて、ジャッジ役専門でという方もぜひご参加ください。

プレゼンが終了した時点で、参加者全員で投票します。プレゼンした方は自分が紹介した作品以外で一番興味を持った作品に投票してください。

投票でその日の「イチオシ小説」を決定します。「イチオシ小説」に選ばれた方は、徳島文学協会H・Pに本の紹介文（原稿用紙二枚程度）を作成してください。協会より原稿執筆料として五千円分の図書カードを進呈します。小説の楽しさを皆さんで味わっていただく講座です。気軽にご参加ください。

開催日 七月二十二日（土）十四時～十六時
 場所 アミコシビックセンター
 参加費 プレゼン参加者千円
 観客・ジャッジのみ三百円

定員 十五人
 ※七月十五日迄に徳島文学協会事務局へ電話かメールにてお申し込み下さい。

「たし」：古代エジプト文明の知恵の神
 「アナー」：由来する。

「おとなのための文学講座」

皆さんがよくご存じの著名な作家たちの素顔に迫ります。

第一回目は「夏目漱石と芥川龍之介」というテーマでお話します。夏目漱石の作家デビューから、有名な作品がどのようにして誕生していったかその秘密に迫ります。そして彼の文学観や人生観も明らかにしていきます。講座後半は漱石と入れ替わるようにして文壇に現れた芥川龍之介の人生を明らかにします。予習や予備知識は一切不要です。これまでの文学の概念を覆す、面白くてわくわくする文学講座をぜひお楽しみください。

開催日 八月十九日（土）十四時～十六時
 場所 アミコシビックセンター
 参加費 会員千五百円・非会員二千五百円
 講師 四国大学教授 佐々木義登
 定員 十七人

※八月十二日迄に徳島文学協会事務局へ電話かメールにてお申し込み下さい。

ご入会のお申し込み方法

- 一 事務局に資料をご請求ください。入会案内一式をお送りいたします。
- 二 会の運営にご賛同いただけましたら、同封

徳島文学協会が発足

県内愛好家 文芸誌や講座計画



徳島県内の文学愛好者約50名が、小説に特に関心を持ち、プロ作家を招いた家有志が郷土の文芸を化した文芸誌の創刊 講演会などを行う。28日より一冊発展させよう、や、郷土の作家発掘を、日、徳島市のJ.Rホテル「徳島文学協会」を目的とした小説実作講座「クレメント徳島で発足式が開かれた。活動としては他に▽賞券の出る全国公募の短編小説賞創設▽県内小松島市出身の芥川賞作家・吉村萬太郎さん▽学識者▽大学文学部教授や国語教員、図書館司書らによる文学鑑賞の学術的な研究、などを中心とした講座を計画している。講座などは夏から秋をめぐり、県立立寄道館などで小説実作講座を開いていく。四国大の佐々木義登教授が50名の徳島文学愛好者に「新風を吹かす」と、受講生や呼び掛けた。

会員は、今年の「第23回三田文学新人賞」授賞者高田友季さん(31)▽美馬市美馬町天神、会社員▽ら31人。会長には佐々木教授が就き、父が小松島市出身の芥川賞作家・吉村萬太郎さん(56)▽大阪府貝塚市、ら6名が賞員に就いた。

発足式では、吉村さんと四国大の松原和美さんら8人が出席。佐々木会長が活動の方針を説明した。佐々木会長は「国民の皆さんが心豊かな生活を送れるよう、文化的、芸術的側面からサポートできる団体になりたい」と話した。

年会費千円。問い合わせは事務局の久保訓子さんへ電話080(6284)0006。(福本晃)

徳島文学協会発足式を伝える徳島新聞記事 2017年5月28日

事務局からのお知らせ

公式ホームページがまもなく完成します。トップページで、最新の講座やイベント情報が一目でわかるようになっていきます。協会自体、産声をあげたばかりなので、少しずつ手探りでその役割や活動の充実を図っています。それらの情報を、いち早くホームページでお伝えしていきます。

公式HPは『徳島文学協会』で検索できます。
<http://www.t-bungaku.com/>